



「JAPANESE EVENING」で日本の歌を紹介

で、スポーツをするもの、楽器を弾くものさまざまいて、これも日本の高校教育では考えられないことだったと思う。いささつは実は忘れてしまったのだが、私はタイ、ミャンマー、ラオスの国境地帯の山岳民族をたずねて回るグループに合流した。

ガイドに先導してもらい、いくつかの山岳民族をたずねてバス、徒歩、川下りの小舟に乗って回った。もちろん現地の人の中に宿泊し、トイレは青空のもと、風呂は近く近くの小川で水浴びをして一週間過ごした。また「Golden Triangle」と呼ばれるケシの不法栽培地へも行くことができた。

これらUWCでのいろんな経験からとにかく世界にはいろんな人、言葉、考え方、価値観があってそれらに柔軟に対応してやっていくことが大切なことを学んだと思う。

北海道で外科医をやってみたい

留学後、一年半の予備校生活、七年間の大学生活を経験した。その間に一カ月間の北海道の牧場でアルバイト生活も経験し、何とか日本の医師国家試験に合格して、北海道で外科医をやってみたいなどおぼろげながら思い始めたのが研修医として働き始めた医師一年目の頃だった。この時もやはり周囲の反対が大きく、結婚して二年ほどの身重の妻と一歳に満たない娘を車に乗せて一路北海道へ向けて旅立った。この時の思い切りの良さは、やはりシンガポール留学で培われたものだったと思う。

現在、北海道で外科の勤務医として働き始めて一四年目になる。病気は人を選ばない。いろんな背景を持った患者さんたちと外来で、病棟で、顔を合わせ訴えを聞き、この患者さんに一医師としてどんなサポートができるかを日々考えながらやっていくなかで、UWCでの一つ一つの経験が生きている実感がある。もし留学の経験をしていなかったらどんなキャリアを積んでいたか想像もつかないが、その後の人生観をも左右する貴重な経験であったことは間違いないと思う。この原稿を書くにあたり、家族をはじめ物心両面でお世話になったすべてのの方々に感謝したい。

経済広報

7
月号

定価
315円
(税込)

財団法人 経済広報センター
TEL:03-3201-1412
FAX:03-3201-1404
E-mail:keizaikoho@kkc.or.jp

特集 広報と法務

緊急時における広報

中島 茂 中島経営法律事務所 代表弁護士

広報に関する法律

～表現の自由としての広報活動とその限界～

縣 幸雄 大妻女子大学 文学部 コミュニケーション文化学科 教授

派遣
講座
企業
人

岡部比呂男

井阪隆一

ヤマハ 執行役員 楽器事業本部
副本部長(製造担当)
ピアノ事業部長
セブン-イレブン・ジャパン
取締役 常務執行役員
商品本部 食品部長

メディア探訪

湯谷昇羊

『週刊ダイヤモンド』
編集長

業界団体の
広報課題を聞く

山根 哲

セメント協会
広報部門 統括リーダー

世界にはいろいろな人、言葉、考え方、価値観がある

一九七九～八一年UWCSEA（シンガポール校）在籍。九〇年山口大学医学部卒業、三年間の研修医生活。九三年北海道大学医学部第一外科に入局。以後、北海道内の病院での外科研修を経て現在帯広協栄病院外科勤務。



帯広協栄病院外科医師

蔵貫勝志

くらぬき かつし

海外に出てみたい

山口県の一地方都市のサッカー好きで、年であつた私は高校に入学した頃からだれに感化されたわけでもなく（今はそう思っているが）、海外に出て行ってみたいと強く思い始めていた。英語を習いに塾に通い、街中で外国人を見かけると英語で話しかけたりもして、自宅に突然彼らを連れて来て母親をびっくりさせていたことを思い出す。日本語で見知らぬ日本人に話しかけるより英語で外国人に話しかけている自分が随分大胆だったように思える。当時英語をしゃべることに抵抗はなかったし、短波ラジオで英語放送も聞いて身近に感じていたのだろう。

そんなとき高校の担任の先生から「こん

な留学の話があるぞ」と聞いたのがUWCの留学制度だった。当時私にとって海外への留学なんて夢のまた夢に過ぎないと思っていたがせっかくなりの機会だからと、初めての上京でもあり、力試しと思ひ受験してみた。家族や高校の先生からは留学に対し否定的なアドバイスを受けたこともあったが、何事も経験と思ひ反対を押し切って留学を選択した。そしてUWCSEAの一期生として貴重な留学経験をさせていただくことになった。

サッカーと柔道で

とにかく見るもの聞くものすべて初めてで英語でのコミュニケーションもろくにとれず、晴れたシンガポールの青空を見上げたこともあった。そんな中で鮮明に覚えて

●(社)ユニテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名前後の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに四〇七名の卒業生を輩出している。

いるのは、寮のいろんな国から集まった仲間であつた。最初はミニサッカーのゲームをやったときのことだ。みんなとつさの言葉は母国語だが、いわゆるアイコンタクトと身振り手振りで結構楽しくサッカーができた。サッカー好きだったこともあるが、日々の生活の中で楽しさと充実感を感じた瞬間があった。また「JAPANESE EVENING」という日本の文化を紹介する夕べでは和太鼓を借りてきてみんなでたたいたり、小学校六年間通って身に付けた柔道三級の腕前で(?)、たみと柔道着を借りてきて受身や技の模範演技をしたりもした。自意識過剰かもしれないが、外国で日本人である私が柔道着を着ているだけで何となく一目置かれていた感じがして妙な気分だった。

Project Week

もうひとつ忘れられない経験は「Project Week」というカリキュラムだった。一週間時間を与えられ好きなことをやってそのレポートを書いて提出するというもの